

第6回

星槎文芸大賞

令和二年度

受賞作品集

星槎国際高等学校 星槎学園中高等部 星槎中学高等学校
星槎もみじ中学校 星槎名古屋中学校

- 星槎大学・星槎道都大学 監修 -

「まだ見ぬ世界」野田明日香（星槎国際高校高松）



「放課後の本屋」

上泉 結生（星槎高等学校2年）



「飛行機からの景色（冬の夕日）」

川本 麗華

（星槎国際高校広島 フリースクール 中学3年）

● 各ページに掲載した挿絵は、第17回「全国移動美術展」の展覧作品の中から、ご紹介させていただきました。

令和二年度受賞作品

【最優秀賞】

詩「雨の日」……………2

星槎高等学校 三年 木賊 知花

【優秀賞】

小説「ローリエの花」……………2

星槎学園北斗校 二年 藤田 夏未

【優秀賞】

エッセイ「優しい世界〜私が星槎で学んだこと〜」……………4

星槎国際高校札幌北 二年 下山 真穂

【優秀賞】

俳句……………5

星槎国際高校仙台 三年 村山 未空

【審査員特別賞】

詩「あめ玉と百円玉」……………5

星槎国際高校帯広 一年 宮越 葵陽

【部門賞】

小説「僕は君にキスをできない」……………5

星槎国際高校八王子 一年 古川 恵海

【部門賞】

エッセイ「コネクト」……………10

星槎高等学校 三年 池添 健贈

【部門賞】

小論文「人類と宇宙の関わり」……………11

星槎高等学校 一年 遠藤 寛幸

【部門賞】

詩「空はまもる」……………13

星槎国際高校横浜鴨居 一年 竹内 彩乃

【部門賞】

俳句……………13

星槎国際高校八王子 二年 亀松 悠杜

【部門賞】

短歌……………13

星槎学園横浜ポートサイド校 三年 筒井 真優

【生徒会特別賞】

俳句……………13

星槎学園横浜ポートサイド校 三年 横山 航大

【星槎大学長賞】

小論文「アフリカの貧困について」……………13

星槎高等学校 三年 杉元 佑衣

【星槎道都大学長賞】

小説「日記」……………14

星槎学園横浜ポートサイド校 一年 三嶽 諒花

【中学生部門賞】

詩「せみのリサイクル」……………20

星槎学園北斗校 中等部一年 藤堂 貴

【中学生部門賞】

俳句……………20

星槎学園北斗校 中等部二年 和田 尚樹

【中学生部門賞】

短歌……………20

星槎学園北斗校 中等部二年 石倉 皓太

【最優秀賞 詩部門 受賞】

雨の日

星槎高等学校
三年 木賊 知花



清々するほど雨の日に、
空が真二つに割れたような
贅沢な雷鳴を聞いた。
その日はなんだか気分が良くて
外を歩く予定もないのに
控えめに香水をつけた。

清々するほど雨の日の夜は、
縫い目が綻んだタオルケットのようだ。
今年の夏の夜に花は咲かない。
届かぬ星を握ることもできない。
だから空の青さと目が合うのを待つ。
机に余った虫よけと日焼け止めを転がしながら



「雨の日」
小前 奈々美 (星槎国際高校北九州2年)

【優秀賞 小説門 受賞】

ローリエの花

星槎学園北斗校
二年 藤田 夏未



西日が沈む窓際に、ローリエの苗木が一つ。真っ直ぐと伸び凜として
しているその姿は、このローリエをくれた彼女にそっくりだった。

カシヤリとデジタルカメラのシャッター音が響く第二の裏庭。俺

「それじゃ」

彼女の顔を見ることもなく、自分の帰路に足を向け歩き出す。すると、背負っていたリュックをつかまれ、がと後ろに引き戻される。

「……なんだよ」

「ゆうきにとって、私は友達だよね？」

「は？」

意味が分からなかった。というより、やはり意図がわからなかった。なぜ唐突にそんな事を聞いてくるのか。

「友達でしょ？」

「あ、ああ。友達、だな」

「だよね」

言い慣れない言葉を使い、嫌な気持ちになった。彼女はふふっと笑い、突然目の前に鉢植えを出現させる。

「これはね、ローリエっていう苗木なんだ。三月頃になると花が咲いて可愛いんだよ」

声も出ない俺を置き去りに、彼女は一人で楽しそうに話を進める。

「ローリエは日本語にすると月桂樹。葉の花言葉は、私は死ぬまで変わりません！ って意味なんだ」

「忠誠ってことか？」

「んー、ちょっと違うけどそんな感じ」

やっと状況を飲み込み、言葉を投げかければ、彼女は口元を緩め、満足そうに笑う。そしてローリエの鉢植えを押し付ける形で渡された。

「君にとって私は友達、私にとっては……うん、君は友達かな」

真面目な口調で呟いていたが、突然スマートフォンから着信が入り、彼女は飛び跳ねる。

「びつくりしたあ。もうこんな時間？ じゃあまたねー、ゆうき」

「おいこれ……、はあ。俺が育てろって？」

走り去っていく彼女の後ろ姿を見つめながら、さっきの言葉の意味を考える。友達、忠誠。死ぬまで友達、そう言いたかったのか？ 彼女に質問する機会もなく、次の日彼女は引越してしまった。お別れを言うのが嫌で、クラスの友達にも内緒にしていたらしい。

は写真部のコンクールに提出しなければいけない。奇跡の一枚探しの途中だ。臨場感溢れる人の姿や動きより、自然特有の優しい雰囲気が出る空や草木を撮るのが子供の頃から好きだった。

「変わらないねーゆうきは」

「……お前こそ」

俺に付きまといってくるストーリーカー気質は変わらない。

「いま心の中で変な事言ったでしょ」

「別に」

パシヤリとまた一枚写真を撮れば、ため息混じりに、もう遅いから帰ろ、としゃがみこんでいた腕を引き上げられる。

「一人で帰れよ」

「嫌ですー。あ、もしかしてまだコンクールの作品きまつてないの？」

「凶星で何も言えない。視線を左にずらしながら、やつぱりコイツは嫌いだと再認識する。」

「ごめんごめん。君の作品は忍耐力との勝負だもんね。私は人の写真ばかりだから忘れてた」

被写体が常日頃からいる彼女にとって、命の宿った自然を人間の見える形で写真におさめるというのは退屈でしかないのだろう。

「試しに一枚私とか撮ってみない？ 一枚撮ったら今日は帰ろうよ」

「ただらと話をしていたせいで、空の色はとくにオレンジに染まっていた。無言で一枚撮った振りをした。そして足早に校門へと歩きます。」

「今ホントに撮ったー？」

「撮った撮った」

後ろから追いかけてくる彼女に向かってホラを吹き、鼻で笑った。

いつも通りの帰り道。コイツが勝手に横に並んで歩くのも慣れてきた。でも正直言って気味が悪いと思う気持ちは変わらない。何事にも普通の結果しか出せない俺は、個性のない人間だと自覚している。写真を撮る技術だって……特別才能があるからとかそういう理由がある訳じゃない。だから余計に気味が悪い。何もない自分につきまとい彼女の意図が読めないから、なおさら。

「あ、もう分かれ道」

スマートフォン越しに「ごめんごめん」と友達をなだめている彼女の声は僅かに聞こえる。彼女が傍にいますという事が日常になりつつあった学校生活。そして帰り道。

「あつさりしてるなあ……あいつ」

その時はただその一言に尽きた。二月の草木が香るそよ風。頬杖をつき窓の外を眺める姿は、はたから見ればかっこつけているように見えるだろうか。でも仕方がない。彼女がいなくなった今、このどうしようもない休み時間の暇を使いこなす術が俺にはないのだから。あの時、彼女の写真を撮らなかつたことを少しだけ後悔した。

それから凄まじく早いスピードで、一ヶ月が過ぎた。勉強をして、写真を撮って、また朝が来る。毎日写真を撮っているのに、コンクールに出す写真は未だに決まらない。今週が最後のチャンスだと顧問の先生からも警告された。

「うわ、雨降ってきた」

写真のセンスも運も絶不調な俺は、いつもの第二の裏庭には寄らず、家に帰る。本やプリントが散らばっている素朴な自室には、彼女が押し付ける形でくれたローリエの苗木がよく映えた。それがあただけでインテリな部屋へと早変わりする。

「……あ」

制服を脱ぐのも後回しに、黙々と水やりをしていれば、やっと咲き始めた黄色い花がちらりと顔を覗かせている事に気がついた。

「葉の花言葉は忠誠、それならこのローリエの花言葉は？」

彼女が楽しそうに説明していたのを思い出し、興味本位でおもむろに図鑑を開く。

「ローリエ別名月桂樹。花言葉……裏切り」

意味が分かった途端、彼女の姿がフラッシュバックした。

もし友情という類のものではなく、他の何か、違う意味合いで自分に接していたのであれば。彼女にとってそれは恐らく……恋心、というものだったのかもしれない。

今更気がついてしまった彼女の心情をどうすることも出来ず、俺は咲き始めた花の蕾をそっと摘み取った。カシヤリとシャッター音

が響き、受け取った日となんの変わりもないローリエの苗木がカメラ越しに映し出される。ローリエの花は綺麗に咲き誇ることなく、これからも摘み取られて矛盾した姿で生きていくのであろう。本当の開花時期はいつになるのだろうか。

【作品名、ローリエの花】
提出期限ギリギリの作品に矛盾した名前を付け、倒れるようにベッドへ仰向けになる。

「……俺にとつても、お前はきつと、」
ザザーっと強い風が窓から吹き込み、吹きは一瞬にして掻き消されてしまった。

花言葉。それはどんな意味合いを含んでいたとしても、捉え方によっては不幸を招くものである。そう、運すぎた青春の余韻に浸る彼らのように。

【優秀賞 エッセイ部門 受賞】

優しい世界へ私が星様で学んだこと

星椋国際高校札幌北

二年 下山 真穂



私は今、通信制高校に通っている。

二年前の私が知ったとしたら、どんな反応をするだろうか。当たり前になり毎日、中学校に通い、当たり前になり全日制高校を志願していた過去の私が聞いてしまったら。

時間の流れとは早いもので、私が星様に転校してから一年が経とうとしている。エアコンなんて気の利いた物はない、暑苦しく黄色い部屋の中で寝転んでみると、どうしても去年の今頃を思い出してしまう。ただ、ひたすらに眠たくて重たくて苦しくて、ろくに立つことも出来なかった時の話だ。町中に溢れる音におびえて不眠と過眠を繰り返して、毎日、泣いていた。食べていないのに巨大化する体

戻りたくなかった。そんなことをしたら、今度こそ心を壊してしまうかもしれないのに、だ。すり減った自尊心は、なかなか治ってくれないものである。

しかし今は違う。何が私を変えてくれたのかと聞かれてもまだ答えられないが、少なくとも、もう昔に戻りたいなどとは思わない。

星様で出会った優しい世界は、無意識にしかし着実に私を癒してくれた。ほほ、毎日朝から日暮れまで予定があっても奔走し、風邪一つひいていない。よく食べよく笑い、よく眠る。当たり前を捨てるのは怖いことだと思っていたが、それは違った。そもそも、そんなものは存在しないのだとすら思う。すべては私の中にあり、私の中でのみ意味を得るのだと知った。無教に存在する当たり前の中の一つが、ただ形を変え在り続けているだけ。それが分かっただけで、大いにここへ来た意味があったと思える。私が私の手で私を創り変えた瞬間。

あの紙切れは、一体どこに行ったのだろうか。

【優秀賞 俳句部門 受賞】

星椋国際高校仙台

三年 村山 未空



空の雲 千切れて成るや 綿の花



「月と猫」

栗原 愛 (星椋学園大宮校 2年)

と伸ばしきった黒髪。視界に映る全てが憎らしかった。
そんな私のもとに届いたのは、留年確定を告げる無機質な紙きれ。ひどく動揺し狼狽えたはずだが、よく覚えていない。だが、それが引き金になったのはよく憶えている。一ヶ月もの時間をかけて、留年を避ける方法をしらみつぶしに探しあげた。自らに植え付けられた当たり前から外れる恐怖は「留年」のおかげで消え失せていたらしい。

五校以上に足を運び、十校以上の資料を読み、二十校をリスト化して比較した。今だから言えることだが、星様はその過程で閲覧したまとめサイトの中になった数行で挙げられていたに過ぎない。とても小さく存在感のないデータであった。だが、何故か私はそれに惹かれ、気付けば個人面談を予約していたのだ。入学の決め手は、これまた言うところ怒られそうだが、現センター長・伊藤先生の「学ぶ意欲のある子は全力でサポートし、いくらでも機会を与えよう」とい言葉が、それを必要としない子に私たちは何もできません。」という言葉だった。他の学校が、どんな子にでも手を差し伸べ必ず卒業まで導くと息巻いていた中で、伊藤先生のこの、ある意味どこまでも生徒に自由と責任を持たせる姿勢が一際異質に映ったのだ。一見、冷たく聞こえる発言だが、裏を返せば自分の意思に呼応して対応し助けてくれるということなのだ。帰路を歩く頃には、もう私の道は固まったも同然であった。

長らく廃人のような暮らしをしていたので、最初は行って帰ってくるだけでもヘトヘトだったかというところ、そうではなく、意外とすんなり私は星様に順応した。初登校日に行った美術館の帰り、私はクラスメイト達と抱き合い、自撮りをして連絡先を交換していた。我ながら有り得ない馴染みぶりだが、自然とそうさせる空気が星様にはあった。例えば授業中に突然錯乱し呼吸を乱しても、誰も鋭い視線を向けたりしない。以前、散々馬鹿にされた髪型や服装をしても、むしろ肯定し受け入れられる。そんな優しい世界に、いきなり飛び込み待っていたのは、言いようもない不安であった。褒められるたび、慰められるたびに甘んじてそれを受け取る自分に嫌気がさす。時折、どうしようもなく苦しいことだらけの当たり前を生きていた自分に

【審査員特別賞 詩部門 受賞】

あめ玉と百円玉

星椋国際高校帯広

一年 宮越 葵陽



お姉ちゃんといっしょに おてつだいをした
お母さんは

わたしにあめ玉を お姉ちゃんに百円玉をくれた
お姉ちゃんはおかわいそう

百円玉はおいしくないから かawaiiそう
なのに お姉ちゃんは ぴよんぴよんはねていった
なんでもかな

つつみ紙を ひっぱってはがして
あかいあめ玉を 口の中どころがした
とってもあまかった

【部門賞 小説部門 受賞】

僕は君にキスをできない

星椋国際高校八王子

一年 古川 恵海



患者を呼ぶアナウンス。
鼻を掠める薬品の匂い。
遠くで聞こえる早足の足音。
ここは病院。
昔から、母は病気を患っており、こうして病院に付き添うことは少なくなかった。
今日はやけに診察が長引いていて、堅い長椅子に座りっぱなし。一人、また一人と席を立っていき、最終的には私一人となった。

先程、病院内の照明が変わったことから、夜が近づいてきていることが分かる。

座り心地を直すために、足を組んだ。

その際に、カサリと足元から音が鳴って、内心驚きつつも、恐る恐る椅子の下を覗く。

暗くてよく見えないが、音の正体を手で探ると、何かが手に触れ、先程と同じような音がした。

手でそれを掴み、椅子の下から取り出す。

「つる。」

音の正体は、綺麗に折られた白い鶴だった。

子供の落し物だろうか？

それをまじまじと見つめ、これを一体どうしようかと頭を悩ませる。

その時、誰かの足音が私の後ろで止まった。

咄嗟に振り返ると、母が点滴と共に立っ立って、「ごめんね、入院することになったちゃった」と苦笑いしながら告げる。

「今から病室に行くんだけど一緒に来る。」

その言葉に頷き、母と並んで歩く。

お互い無言で、点滴が鳴らすカラカラという音が病院を満たした。

明かりの薄い中、母の病室からの帰り。

色とりどりの千羽鶴が、ぶら下がっている部屋。

曇りガラスの向こうは、淡い光が漏れだしていた。

たった一瞬の気まぐれ。

ポケットから先程の鶴を取り出し、千羽鶴の下にちよこんと置く。

持ち主がいない忘れ物には、新しい持ち主を作ってあげれば良い。

少し、皺の寄った鶴が病院内を彩った。

この前と同じ椅子、その下にさも当たり前という様に折り鶴が置かれていた。

皺の寄り具合を見るに、私が昨日置いていった物だ。

試しに、例の病室の前に行くとい鶴だけが無い。

次の日も、次の日も、そのまた次の日も、同じことが繰り返され、

だんだんと、この鶴は呪われているんじゃないかと思いはじめた頃。折り鶴の中身が開かれる。

「これ、いつも置いていくの君？」

日課のごとく、鶴を置きに来た私に声をかけたのは、高校生くらいの彼。

驚いた私は三センチほど飛び上がった。

「困るんだよね、こういうの」

鶴の羽を掴み、ゆらゆらと揺らしながら彼は言う。

え、いきなりタメ口？ と思考する私を、責めるような目で彼は見続ける。

やっと出た言葉は、「ごめん」だけだった。

これは僕が持つてちゃ駄目なんだ、そう呟いた彼は私の前で鶴を崩し始める。

綺麗な形だったそれが、歪に歪んでいく。

最後に残ったのは、くしゃくしゃになった紙と、丁寧に書かれた文字。僕は、もうすぐ死にます。

「だって、これは遺書なんだから」

彼からは薬品の匂いがした。

病室に入れば、同じ匂いが部屋中を満たしている。

彼の点滴は果実のように三つ下がっており、針との接触部分に貼られたガーゼが痛々しい。

先程の遺書は、彼が破ったことにより無効となった。

彼曰く、「もういらぬ」らしい。

座ってと促され、独り言のように語る話を、私はパイプ椅子に座りながら聞いていた。

生まれつき、病弱な体質だった彼は、ほとんどの時間を病院で過ごした。

家も、学校も、あまり覚えていないと言う。

そして、高校生になった直後、心臓に欠陥が見つかった。

「は？」

その数日後、私と彼は病室で「死ぬまでにしたい十のこと」を書いていた。

彼は、本当に幸せになれるの？ と疑いながらもペンを動かす。

結局これは、とある小説のオマージュに過ぎなくて、猫を犠牲に寿命を失った彼も、最期は幸せだったと信じた私のエゴだった。

つらつらと進む文字は簡条書きに纏まり、願いに変わっていく。

彼の願いは一風変わっていて、映画館のポップコーンを食べたいだとか、服を着たままプールに入りたいだとか、くだらないものばかりだった。

その中でも目を引いたのは「体に悪い物を食べるってなに？ 腐ったチーズとかってこと？」

「んなわけあるか。ジャンクフードとか、そういうの」

私たちは友達に近い関係になれた。それこそ、崩れた言葉で話すくらいには。

「僕もうすぐ死ぬじゃん」

木漏れ日が眩しい午後。

あくまで彼は淡々と話す。

君は、死が近い人間と一緒にいる。

それはつまり、僕が死んだ時には少なからず喪失感を伴うということ。

そうならない為に、一つ提案したいことがある。

これならば、僕の素性は分からないし、必要以上に踏み込めない。

あとは時間が攫ってくれるのを待てば、君は苦しまずに済む。これは僕なりの優しさだからね。

「偽名で呼び合おうはどう？」

彼は私の肯定を待つように、じつと言葉を待つ。

断る理由が無かったので、首を縦に振る。それを見届けると彼は、辺りを見渡し

初めての、命に関わる病気だった。

今は薬で抑えられているものドナーは必須、それと同時に、ドナーが見つかる約二年間、生きられるかも分からない。

深刻そうな顔で告げられる内容は、まだ十七歳である彼には重すぎた。

けれども、ほとんどの人生を病院で送ってきた彼には、執着するものが無かった。

この世に溢れかえっている娯楽ですら、きつと片手で数えられるくらいしか知らないのだろう。

素直に言ってしまうと、彼を引き止めるものは何一つ無いのだ。だから最後に人間らしく、丁寧に遺書をしたため誰かに渡すことにした。

まあ、その遺書は先程自ら破いてしまったんだけど。

窓から湿った夏風が吹く。

それが肌にとわりつき、鬱陶しい。

暗い話をどう肯定するか、拙い私は口を閉じることしか出来なかった。

「僕が遺書を書いたのは、誰かに存在を知ってほしかったから。君にはあらかた人生を話したし、あとは死ぬのを待つだけ。ありがとう」

淡々と告げるが、お世辞にも感情は入ってなく胡散臭い。私は、まだ口を開けないでいる。

そんな様子を彼は一瞥し、もう帰っていいよと目を逸らしながら言う。

渋々、椅子から立ち上がり、帰ろうとして足を出す、心のどこかが突っかかる感覚があり、足を止める。

このまま病室を出れば、彼は言葉通り死を待つのだろうか。

そんなことをしてしまえば、自分が殺人犯にでもなったかのように思えてしまう。

深い悲しみではなくとも、後悔はする。

感情のささくれを取るように、やっと開いた口。「あ、あの、幸せになつてから死ぬのは、どう？」

「じゃあ、君の名前はクマでいい？」
目線は私のスクールバックに縫い止められ、指先はくまのぬいぐるみのキーホルダーを指す。

適当がすぎる、と思ったが自分であだ名を考え、教えるのは恥ずかしかったのクマにした。

「あれ、名無しくんがないい」

彼と出会って数ヶ月。

病室を覗けば、必ずいるはずの人物がない。

そこにあるのは、まっさらな白いシーツと綺麗に折りたたまれた布

木漏れ日は相変わらず、シーツを眩しく照らしている。

彼は意外とぶつきらぼうな方だから、ここまで整頓されている部屋は珍しい。

ここで一つの可能性が浮かび上がり心臓がドキッと跳ねた。

もしかや、お亡くなりには？

一秒ごとに加速する鼓動は、静かな部屋を鳴らし、辺りの雑音は耳鳴りに似た音にかき消され、呼吸音が薄く開いた口から漏れだしていく。

だから気づかなかった。

後ろから忍び寄る影に。

「ぎゃいあっ」

ふはっ、と背後から笑い声がする。

肩に置かれた両手はぶるぶると震えていて、覚束無い。

「めっちゃ、変な声、だすじゃん」

声もガタガタで笑うものだから、そんなに笑ったら腹筋がシックスバックになるよと忠告すると、彼は床に崩れ落ちた。

暑さを含んだ風が肌をなぞる。

彼はまだ爆笑の嵐の中において、時折しゃっくりのような声をあげた。

微かな羞恥心につつかれながら、私は足を組み直す。

「死んだかと思った」

ぼつり、私が呟く。

加算も減算もされなくて、ずっとこのまんま。

「私たちに、びったりだと思っ」

彼は納得したように頷き、「うん、いいと思う」と笑った。

別れは突然訪れる。

「引越すことになった、海外に」

彼は読みかけの本を落としかけ、慌ててそれを受け止めた。

「えっ、急すぎない？ 帰国子女にでもなるつもり？」

理由は？ と聞かれたので、私は語る。

先日、母が亡くなった。

もう歳だし、仕方のないことである。

母の死期を悟り、父は一時的に帰国していたが、亡くなったことに

より私は父の仕事場である海外に行くこととなった。

たったそれだけ。

暫く黙っていた彼だったが、目を伏せ

「いつ頃、国を出るの？」

「三日後」

そっか、と消え入りそうな声で相槌をした彼は、ちゃんと僕のこと

忘れてね。

これから死ぬ人間を覚えている必要はないからね、と私に告げる。

「分かった？」

「分かった」

「あと、長生きするね」

「幸せには、なってくれないの？」

「どうだろう」

幸せになってくれないと困るんだけどなあ、と苦笑いをすると、彼は悲しそうに笑い「善処します」とだけ答えた。

私が海外に行くまでの三日間。

彼は異様に眠いと言い、ベッドで寝ていることが多くなった。点滴の袋が一つ多くなっていることに気づいた私は悲しくなって目

「精密検査してただけだよ」

まだ笑いを含めた声で彼は言う。

「ほんとに、あの声やばいって」

「うるせー、匿名野郎」

「辛辣すぎる」

「好きに呼べって言ったのはそっち」

お互い本気には思っていない、おふざけな会話なのでまた彼は笑い、私も笑った。

ふと、サイドテーブルに置いてある白いガーベラが目にはいり、「愛

されているんだね」と私は独りごちた。

彼は「えっ？」と素つ頓狂な声を上げ、先程の笑いは顔から剥がれ

落ちていく。

「花言葉は希望。ガーベラ自体はよく、お見舞いに使われる花だよ」

白い花は、お見舞いにはタブーだけれど、花言葉が良いから悪い意

味ではないと思う、と付け足してやる。

彼は、思うところがあつたのかガーベラの花弁を指先で撫でた。

心なしか、瞳が潤んでいる気がしたが、気づかないでおいてあげた。

「僕とクマとの関係ってなんだと思う？」

彼は続ける。

友人でも、ましてや恋人でもない。

オスカー・ワイルドは、男女の友情は成立しないと説いた。

この関係に名前をつけるとするなら、どう呼べばいい？

「残念ながら、私に難しいことは分からないですよ」

「うん、そんな顔してる」

「おいコラ」

それでも、分からないがらに考えてみる。

なんとなく透明で、あやふやで、そんな関係に名前をつけることな

ど困難だ。

お互い、頭を回しながら適切な単語を手繰り寄せていた。

「二十」

を逸らし、爪先を見つめた。

最終日も、彼は泥のようにベッドで寝ている。

ドラマのように、お互いが涙で顔を濡らし、別れを告げるという展

開にはならず済んだ。

意外とあっさりとした別れだな、と客観的に思う。

呼吸をするたびに、上下に動く布団をただ見つめる。

窓から暖かい日差しが差し込み、私を眠気へと誘う。

結局、私は面会時間ギリギリまで夢から覚めない彼の隣にいた。

次の日。

僕は窓越しに、飛行機の音を聞いた。

あれから半年が過ぎ、徐々に記憶は薄れゆく。外国の風に吹かれながら、あの一月の出来事を思い出すことも無く

なり、どこか不確かで、夢のような心地を味わった。

手持ち無沙汰に体重を背もたれに預けると、ギギつと椅子が軋む。

不意に、家の外で何かが落ちるような音が聞こえた。何かがポスト

に投函された音だ。

証拠に、荒々しいバイクの音が響いている。

徐に立ち上がり、ポストへと向かう。

ドアを開けると、強い風が髪を弄んでくしゃくしゃにした。

導かれるように、ポストを開け配達物を見る。

その瞬間、音がなくなり、パチパチと記憶が脳を駆け巡って、ここ

ではしないはずの、薬品の匂い。

ゆつくりと、壊れ物を扱うようにそれを手に取る。

目の縁が熱くなるのを感じながら、見慣れたノートを指先で撫で、

表紙を開ける勇氣もなく、ただ抱きしめた。

彼は、私が最後に残した秘密に気づいたのだ。

秘密といっても簡単なもので、彼が寝ている間に新しい住所を書いたメモを、ベッドの格子にセロテープで貼り付けただけの物。

二人で過ごした最後の日。
きつと、彼は私の思いを上手に汲み取りノートを送った。
彼にはもう、必要ないから。

机の上に置かれたノート。
優しい光が降り注いで、そういえば彼も光を纏っていたなと思ひ出す。

未だ、戸惑っている右手が意を決したように背表紙から離れ、表紙の突っかかりを引つ掻けて、開けた。

白紙が目立つノートだったと記憶していたが、見開き一ページを過ぎると、文字が綴られていた。

日記と呼べるそれを一枚一枚、丁寧に捲る。

そして、見開いた文字列「死ぬまでにしたい十のこと」を見つめるが、そのほとんどの願いには斜線が引かれていた。

一つを除いて。

その文字を、指先で撫でる。

すると、紙の裏に何かが挟まっていることに気づいて、私は紙を捲つた。

そこには、綺麗な押し花。

オレンジ色の、カランコエ。

ふわっ、と感情がとぐるを巻いて溢れ出す。

涙でノートを汚さないように、咄嗟に距離をとって、溢れ出るものを手の甲で受け止めた。

感情が一際落ち着いてから、震える手でペンを取り、赤くなった鼻先を吸る。

覚束無いペン先で、幸せになってから死ぬという文字を、黒く細い線で消す。

ずるいじゃないか、こんなのは。

私は決めた。

その通りで星様の教師は面白い人が多いと思う。そもそも授業が授業らしくないのだ。この根底にあるものはやはり共感理解教育という星様独自のカリキュラムを採用しているからだと思える。生徒の共感を引き出す授業をするのが星様の教員だ。身近なものから学ぶ、命のつながりを学ぶ、仲間とともに学ぶ。切り口を変えることで教科書の文字を追うだけの授業よりもつつきやすい。感性を研ぎ澄ませ、思いっきり学ぶことで、入学式の頃にはぶかぶかだった制服もいつの間にか身丈に合うようになり、気づけば大人になっているのである。教員っぽくない教員って生徒の感性を引き出す教員のことなのかもしれない。

変化値って何だろう

忘れもしない話がある。あれは星様中学校の卒業式練習をしていた時のことだ。当時星様中の教頭先生であった蓮田先生の言葉である。「世の中には偏差値という数字で評価する人間がいる。それを否定するわけじゃない。でも一番大事なのはそんな大人の中の中の相對よりも、今この時を生きているあなた自身が入学した頃にくらべてどれだけ変化を遂げたかという変化値が大事なのだと思う。偏差値よりも変化値が大事なんだ」卒業式の練習中だったこともあり、考えたことは僕の中学校生活についてだ。やはり大きいことは、友達を得たことであり、将来の夢を獲得したことだと思ふ。物事を振り返れば、今につながるものが見えるっていうのはよく言うことだけれど、その通りなのだと思う。人生の節目である、中学校の卒業シーズンにこのお話を聞いたことは、とても意味があることだったと今の僕はある。変化値という考え方を僕も大切にしていこうと思ふ。

僕たちが生きていく時代

外国って僕たちが思うほど外の世界ではなくなったのかもしれない。僕は外国というところか遠い存在な感じがしていた。少なくとも小学校を卒業するまでは。僕の初めての海外経験は中学二年生の時に行ったハワイである。星様では、海外とのつながりを大切にしている。そして星様がこんなにも国際的になったのは、宮澤先生が

あなたのことを、忘れてはあげない。
本当は知っていたんだ。

手首につけていた紙製のネームバンド。

そこを見れば、名前なんて一目瞭然。

知るところまで知ってしまったのだから、忘れることはできない。

彩が輝いて、カランコエは暖かな光に包まれていた。

【部門賞 エッセイ部門 受賞】

コネクト

星様高等学校

三年 池添 健贈



はじめに

僕は星様が好きすぎて仕方ない。どれくらい好きかというと、建学の精神、教育理念、教育目標は空で言えるし、友達と旅行に行く際には旅行先にある学習センターを行程に含めてしまうくらい好きなのだ。僕は星様に恋をしている。このエッセイは、六年間星様で心の耕作を続けてきた僕が、肌で感じたことを書き連ねたものである。

教師っぽくない教師

こんな話を聞いたことがある。星様の教員になる際、星様の説明会では必ず「普通の教員になりたい人は今すぐ退席してください」というフレーズが用いられる。これはどうやら、星様がまだ星様でなかった頃、宮澤学園の時代から使われていた言葉らしい。なんとも不思議な話である。教員になりたくて説明会へ来ていたのに、教員になりたい人は帰らなければならぬなんて、その場にいけばほとんどの人間が出鼻をくじかれたに違いない。この原則でいけば、星様にいる教員はもれなく普通の教師ではないと考えられる。確かに私拭ききれなかったのかもしれない。

おわりに

生徒会室に古いアルバムがある。宮澤学園来の卒業アルバムだ。パラパラとめくってみるとずいぶん歴史の流れを感じる。しかし、生徒の顔だけはいつの時代も変わっていないような気がする。これは星様が時代を超越する普遍になったからなのではないだろうか。この根底に宮澤先生をはじめとする先生方の努力があることは、いわずもがなである。

【部門賞 小論文部門 受賞】

人類と宇宙の関わり

星様高等学校

一年 遠藤 寛幸



かつて、宇宙は人類にとって未知なる空間であり、行くことが出来ない場所でした。しかし、長い時間をかけようやく宇宙に行く手段や宇宙のことを知ることが出来るようになりました。今回はその長い道において、人類と宇宙がどのように関わってきたか、三つに分けて説明していきたいと思ふ。

一つ目は、暦です。はるか昔の人々は、月や星、太陽の動きを見て暦や一日の長さ、一年の長さなどを知り生活していました。特に文明が栄えた場所には、それを分ける為に造った建造物があります。人類と宇宙の関係は天体観測から始まったといっても過言ではありません。その後人類は天体観測を続け、星座を作ったりするようになります。そして、その天体観測によって生まれたのが天動説です。

当時は、望遠鏡すらない時代だったので、正しいとは言い難い説だったので、それを信じた人々が大勢いたため間違っているとは思わなかったです。

それが二つ目にあたる、地動説です。この説は、はじめコペルニクスという人物が研究をし、本として出した事から始まります。しかし、それを立証するだけのデータが少なかったのと、天動説を信じるキリスト教の弾圧を恐れたため、これは一つの理論に過ぎなかったのです。それを立証に近づけようとしたのが、ブラーエです。

彼は、コペルニクスの本を読み地動説が正しいと信じてデンマーク王からもらった壁四分位を使い星々の視差を調べていますが、うまくいかず彼は天動説を少し変えたものこそ正しいと思ってしまう。しかし、この観測によりできたデータは、後の天体研究になくはないものとなったのでした。その後、ガリレオが望遠鏡などを使って見つけたことをまとめた星界の法則を出版します。しかし、この時代地動説を信じる人が増えていったがために事態が大きくなり動き始めます。なんと、キリスト教が地動説禁止法を出したので、地動説を唱えたものは、火あぶりの刑に処する残酷なものでした。ガリレオも地動説を信じていたため、思うように物事を唱えられなくなりました。そしてブラーエとガリレオ、両方にかかわりのあったケプラーがブラーエの残した図式などをもとに惑星の軌道が楕円形であることや、軌道によって速さが違う事、惑星の公転周期を発見したことにより、地動説は確かなものとなっていきます。その考えを応用し、微分積分法を利用した万有引力の法則などを見つけたニュートンにより、ついに地動説が立証されます。コペルニクスが本を出してから、約二十年後のことでした。彼らは皆、それまで正しいとされた、常識を疑い多くの時間を研究にあて、地動説を新的常識にしたのでした。どれか一つでも欠けていたら達成できなかったでしょう。宇宙と人類の関係は、常識を疑い自身が正しいと思ったことを研究することへと変わっていったのでした。そして、その常識を疑うことは新たな挑戦になっていきます。それが三つ目のロケットです。ロケットについて最初に記されたのが、ベルヌの書いた『地球から月へ』というSF小説です。その本の口

【部門賞 詩部門 受賞】

空はまもる

星槎国際高校横浜鴨居
一年 竹内 彩乃



空は笑います
皆の活力を上げるために

空は泣きます
自然豊かな地を保つために

空は悩めます
美しいこの星を守るために

空は怒ります
愚かものを裁くために

気付けば 一日が終わります
また明日も、明後日も、明後後日も

こうして 空は見守り続けます
この星に生きる全てのために

【部門賞 俳句部門 受賞】

星槎国際高校八王子
二年 亀松 悠杜

花火打つ 蕾む咲く散る 美醜かな



「宙19:00」
小椋 愛純(星槎国際高校帯広1年)

ケットは砲弾型のようなもので、二七〇mもの筒を地下に作り秒速十一・二kmで、打ち上げるという非科学的なものでしたが、無重力空間や酸素発生器など、科学的に書かれているものもありました。その本はたちまちベストセラーとなりました。その本を読んで影響を受けたのが、チオルコフスキーです。彼は、宇宙旅行の研究に半生をささげます。そして、その研究をまとめた本には、液体燃料でのガスの噴射、壁の二重構造等が、記されていました。それが、のちに宇宙飛行の基礎となったのです。その後、超小型ロケットを作り、その実験に成功したゴダード、ロケット開発はできなかったものの現在のロケットの形の礎をきずいたオーベルト、その弟子でありアポロ計画の立役者となったブラウンによって、人類は宇宙に上りられるようになりました。また、人類以外にも人工衛星が打ち上げられ暮らした役に立ったり、月や火星などを調べ、宇宙や地球生命の謎を調査するようになっていったのです。人類と宇宙の関係は、未知への挑戦と新たな発見へと変わっていき、現在世界の人と協力して、新たな謎へと挑んでいます。

宇宙と人類にとって、到底たどり着かない場所が、今では誰でもいける時代が変わりつつある現代。しかし、そこにたどり着くには多くの人々によって導かれた真実によって生まれた事だと忘れてはいけません。そしてそれは、今も続いていることです。宇宙と人類の関係はこれからも変わり続けていくと僕は思います。



「小さな宇宙空間」
後藤 美悠(星槎学園北斗校1年)

【部門賞 短歌部門 受賞】

星槎学園横浜ポートサイド校
三年 筒井 真優



歳を経て 背丈伸びれど 越えられぬ
雲の峰より 夏の哀愁

【生徒会特別賞 俳句部門 受賞】

星槎学園横浜ポートサイド校
三年 横山 航大



放課後の 涼しい風が そでとおる

【星槎大学長賞】

小論文「アフリカの貧困について」
星槎高等学校
三年 杉元 佑衣



アフリカは開発途上国でまだまだ解決していない問題がたくさんあります。そこで私はアフリカの貧困について焦点を当てて考えました。
地理上でアフリカはヨーロッパ大陸から地中海を挟んで南に位置しています。大陸の北部にある世界最大級のサハラ砂漠はアフリカ大陸の三分の一ほどの面積を占めています。アフリカ大陸にある五十五か国の人口を合わせると約十二億人ですが、二〇五〇年には倍増して約二十五億人と世界人口の多くを占めると想定されています。人口が多いのにも関わらずその半数以上を若年層が占めます。

そのため、世界各国の企業から経済成長と市場拡大を期待する大陸と言われていますが長年貧困に悩まされているのが現実です。アフリカの人が貧困で苦しむのにはいくつかの理由があります。それは行き届かない教育、子どもの貧困問題の深刻化、水道施設などインフラが整備されていないなどです。

子どもが学校に行きたくても子どもの数に対して学校が少なかったり、子どもが家計を支えるために働いたり、教育を受けていない親が多いため教育の大切さが理解されないなど多くの問題があります。この問題をすべて解決するとすると時間と多額のお金が必要になります。少しでもこの環境を良くするために私たちができることはなにか考えてみるのが大切だと思います。一番身近なものだと少額からできる寄付やSNSなどを活用してアフリカの経済事情を調べた新しい発見を自分の観点で周りに発信し、自分を中心にアフリカに関心がある人が増えることも期待できると思います。

アフリカの多くは発展途上国であり、都心部とそうでない場所ではその設備の差に大きな開きがあります。医療設備はもちろん、アフリカの人が病気にかかる一番の原因の水道設備です。内戦や紛争などで住む場所を追われてしまい、水道施設や衛生的な施設がない環境に置かれていた人もいます。インフラ設備がなく、すぐに水が手に入らない状態です。日本のような浄水処理ができていないだけでなく、井戸などの貯水設備そのものがないのです。井戸がない村の人々は池や川、湖など住んでいる場所からできるだけ近くにあり水源に頼るほかなく、そこに水汲みに行かなければなりません。しかしそこでの水は安全と言えるものではなく命の危険に脅かされるリスクがあります。安全な水が使えないとそこに住んでいる人々、特に子供たちに多大な影響を与えます。リスクを負いながらも水分を確保するためには飲む以外の方法です。そして、その水を確保してくるとは子供たちなのです。日本では衛生管理が整っているため水道をひねれば飲み水がでてきます。しかしそんな環境が整っていないアフリカでは毎日子供たちが一日の大半を水汲みという重労働で終えてしまうのです。人々が住んでいる場所に水道を引くことが水問題を解決する上では最重要となります。

らしいな、と思った。

でも別にその先生の話がすごく心に刺さったとかではない。しいて言えば、というだけ。そもそも日記を書くのに理由なんかいるんだろか。自分しか見えないのに。でも何となく理由はあったほうが良い気がする。ので僕が日記を書く理由は国語教師の言葉が心に刺さったから、ということにしておく。とりあえずは。

10月10日(土)

日記2日目。今日は台風が近づいてるらしく雨がひどいので外に出られない。台風で大変な目に遭ってる人たちは可哀想だと思いが、外に出なくてもいい理由が出来たようでなんとなくホッとする。もともと僕は勇んで外に出ていくタイプじゃない。でもみんなが外で遊んだりわいわいやつてると参加した方が良さそうな気がするし、ずっと家に籠っていると謎の罪悪感がある気がする。僕は最近「気がする」が多い気がする。

10月11日(日)

今日で3日目だ。三日坊主ってよくいうけど僕は大体5日目辺りが峠だ。何事も5日までは結構本気でやる。で、6日目に疲れて飽きる。だから今回はあんまり頑張るべきでないことにした。今日はこれでおしまい。

10月12日(月)

疲れた。どうして月曜日ってこんなに憂鬱なんだろう。別に学校が嫌なわけじゃない。友達がいなくて寂しいわけじゃない。でもなぜかつまらない。塾の明るすぎる蛍光灯のせいで頭も痛い。今日はもう駄目だ。朝からお母さんと喧嘩？ もした。お弁当の冷凍食品の小松菜のなんちゃらってやつがあんまり美味しくないって言ったらじゃあ自分で作りなさいと言われた。なんで？ 自分で作ったやつがまずいって言われたんなら分かるし僕だって言わない。でも小松菜なんちゃらを作ったのは冷凍食品の人だろう。怒る意味が分からない。なんか言おうと思っただけ朝はとにかく時間がなくて慌てて学校

実際にアフリカではNPO・NGOが井戸を掘り、井戸の水をくみ上げるための手押しポンプ用の器材を送るなどの支援が行われています。また、今まで村で購入できる水の価格は高額だったため貧しい人は衛生生井戸の水を利用するしかなかったが、自治体や民間企業とのパートナーシップを取り入れ水の価格の適正化を促進する取り組みも進められました。その結果貧困層でも購入できる水準まで引き下げられました。水問題への支援活動は現在も継続的に行われ、安全な水へのアクセスが容易になった地域もあり少しずつ成果を出しています。

このアフリカの環境を変えるには多くの支援が必要になります。私達は生活をするうえで不自由なことがなく暮らしていることが幸せだと私は思います。アフリカの人たちの幸せは安全な場所で美味しいご飯が食べられたり、学校に行けることだと思います。自由や幸せを知っている私達が少しでも支援をして同じような環境を作ることがアフリカの人にとっても幸せだとも思います。多くの方が支援をして助け合えば世界中に幸せが広がっていくのではないかと私は思います。

【星槎道都大学長賞】

小説「日記」

星槎学園横浜ポートサイド校

一年 三嶽 諒花



10月9日(金)

今日から日記を書こうと思う。

理由は特になんだけれど、しいて言えば先生がHRで言った言葉「人間はすぐに忘れる生きものだから、どんなに鮮烈な思い出もやがては美化され、色褪せ、最後には消えてしまう。でも言葉は消えたりしない。ずっと残るんだ」だから先生は本が好きなんだとも言っていた。さすがは国語教師

に行った。お弁当は小松菜まみれだった。他にも色々あった。書くのもめんどくさい。全部小松菜と月曜日のせいにした。もう寝る。

10月13日(火)

特に書くことがない。週で1日くらいなんか本当に何も無い日がある。山田も今日はつまんなかった。がらんとする日。がらんとって響きが好きた。なんかそんな感じの歌があったような気がする。

調べてみた。たぶん西城秀樹さんのギャランドゥかと思われる。

10月14日(水)

今日で6日目。誰か僕を褒めて欲しい。日記結構向いてるんじゃないかな。こんなに続いたのは初めてかもしれない。でもそれはそれでどうなんだ。ま、いいか。日記だと褒めてくれる人もいないから自分で褒めるしかない。エライ。

そういえば今日山田と小林が喧嘩してた。原因はよく分からない。大方山田が何か気に触ることも言ったんだと思う。でもどうせ明日には2人も忘れてるだろうからそこまで心配しなくてもいいか。

10月15日(木)

僕の予想通り山田と小林は和解したようだ。むしろ気味悪いくらい仲が良い。心配するだけ損だ。

帰り道ぼーっと下向いて歩いてたら金木犀がアスファルトに沢山散らばってびっくりにした。ちょっと綺麗だった。今年は散ってしまいうのが早い気がする。

10月16日(金)

今日の学校は転校生の話題でもちきりだった。なんかヤンキーで不祥事を起こしたからいきなり転校することになった、とか背が高くて実はゴジラらしい(実はゴジラって何)とか根も葉もない噂が飛び交っていた。

正直どうでもいい。ヤンキーだろうとゴジラだろうと平和に過ご

してくればなんでもいい。ちなみに月曜からこちらへ来るそうだ。

10月17日（土）

今日は部活があった。文化祭に向けていよいよラストスパート。でも僕は今年を出さないかもしれない。何も思いつかないのだ。合作詩集なんて本当に誰が考えたんだろう。皆んなのレベルが高い詩のなかにボツンと僕の名前と詩が載るのを想像するだけで身震いがある。結局は僕も普通の人間なんだ。人よりちよつと国語ができるからって素晴らしい才能があるわけじゃない。顧問の先生もお母さんもお父さんも買い盛りすぎだ。むしろ理数がハチャメチャな人間として蔑まれるべきだ。

10月18日（日）

風邪ひいた。昨日のネガティブな考えはたぶん風邪のせいだと思う。なんだか熱が上がりそうな嫌な予感と悪寒がする。

10月21日（水）

結局熱がでて丸2日寝込んだ。日記は書けないけどこれは仕方ないと思う。それよりも今日は本当に大変だった。あの噂の転校生、ゴジラよりもよっぽど恐ろしい。いや、別に性格は良いんだけど、とか性格が良すぎた。見た目は確かにヤンキーで、眉は薄いし茶髪だし目つきは死ぬほど悪い。でも怯えてたら『地毛だから安心して』と微笑まれた。微笑みすらも怖かった。だけど事件はその後だ。僕がお昼を食べながらぼけつとしてたらその転校生が床につまづいて僕に午後ティーをぶちまけたのだ。服はビショビショだしお弁当も当然駄目になった。でもヤンキー（じゃないらしいけど）怖いし、と黙ってたら真昼間の平和な教室でヤンキーは土下座をかましてきた。そこからは衝撃を受けすぎてあんまり覚えていない。

『風邪で休んでたって聞いたのに俺のせいでもりかえしたらどうしよう！服ビショビショになっちゃったね、本当にごめんね。クリーニングして返すから!!』

とヤンキーは早口で捲し立てた。私物かどうかは知らんけど花柄

10月25日（日）

昨日は濃い1日を通り越したので、今日はゆっくりした。観たかった映画も借りて観られたし良かった。ある日突然自我を持ってしまった蝶ネクタイとその持ち主のイギリス紳士の掛け合いが面白かった。

10月26日（月）

あの喫茶店の日から原くんにごい話しかけられるようになった。別に悪い人じゃないしいんだけどちよつと目立つからあんまり嬉しくない。目立つのは苦手だ。

お弁当が小松菜じゃなくてほうれん草のお浸しになった。

10月27日（火）

こないだ部活で出した短編小説のコンクール。佐藤さんが優秀賞を獲ったらしい。

僕も出したけど音沙汰なし。顧問のゆき先生が結果が出た人もそうでなかった人もめげずに続けることが大切だと言っていた。僕には分からない。

結局いつまでたっても結果が出なかったとしたらどうなるんだろ。やめ時を見失った人はどうなるんだろ。

今が潮時ですよって誰かが言ってくれるものなんだろうか。

10月28日（水）

これは正確には水曜日の日記とは言えないかもしれない。昨日の夜は時間がなくて、これは今、29日の木曜の朝に学校で書いている。とは言っても特に昨日にかあったわけでもないから、

『優くん、あれ？優くん！荒井さん!!』

『翔太……』

日記を書いたらいきなり現実に引き戻されてびっくりした。確かに書くのに没頭してて声には気づかなかったけど、なにも肩をあんなに揺すらなくてもいいと思う。シャツに皺がついた。ヤンキー（本

のハンカチをポケットから出して必死で僕を拭いた。クリーニングとかしなくていい……目立ってしょうがなかったし。疲れた。

10月22日（木）

昨日のヤンキーの言う通り確かにちよつと風邪をぶりかえしたのか咳が出る。学校にマスクをして言ったらヤンキーは真つ青な顔してまた土下座を繰り返そうとしたので慌てて止めた。クリーニングした真つ白なシャツを返してくれたけどまだ気が済まないらしく、何かお詫びをしたいからと土曜の予定を聞かれた。すこく嫌だ。何か奢ってくれるそうなのだが本当に行きたくない。

10月23日（金）

明日はヤンキーと二時にたいよう商店街のチューリップという喫茶店で待ち合わせ。気が重い。寝る。

10月24日（土）

ヤンキーこと原翔太とお茶しに行った。予想通りの格好で来た。虎が大きく縫ってあるスカジャンにダボつとした白いズボン。未だにこんなザ・ヤンキーみたいな人いるんだなあと素直に感心する。そしてめちゃくちゃ怖い。原くんはメロンソーダ。僕はコーヒーを頼んだ。いいと言ったんだけど奢ると譲らないので奢ってもらった。コーヒーの味なぞ分かるわけがない。しかも原くんは僕のことを優しい、神様みたいな人だと勘違いしているらしくさん付けで呼ぶ。やめてほしい。

ラインも交換させられた。アイコンが狼？でとても怖い。

狼じゃなくて飼っているシベリアンハスキーという犬らしい。名前はプリンちゃん。トイプードル以外にプリンはまずいと思う。

人は違うと言いつ張っている）はやっぱやるのが荒っぽい。

『やつと気づいたく優くんなんか書いてると本当に周り見えなくなるね。やっぱり才能かなあ〜で、今度はなに書いてんの？』

『日記。それと僕に才能なんてものはないよ』

『いやいやいや……何を言ってるの。こないだ文学部の部屋に置いてあった冊子？のやつ俺読んだけどすこかったもん、感動したわ。泣いたし』

『えっ、あれ読んだの……？』

いけなかった？とにこやかに聞いてくる原翔太というやつは見かけに寄らず素直なタイプだから本当に泣いたんだろう。自分の作品を翔太に読まれたのは死ぬほど恥ずかしいけどあの人気のない教室で一人号泣する翔太を想像するとちよつと可笑しくなってくる。教室の窓から見える爽やかな街路樹を背景にそれが日本一似合わない男が泣いている様は異質だが面白い。

『でも本当に才能なんてもの微塵もないよ』

『まだ言ってるの？友達が実は文豪だった衝撃を味わってる俺の気持ちはどうしてくれんのよ』

『えっ、文豪じゃないし……僕に翔太の気持ちはどうこうするのは荷が重いよ……』

翔太はその目つきの悪い目を大きく見開いた後、何が面白いのかゲラゲラと笑った。

よく分かんないけど楽しそうで何よりだ。

『いやでも冗談抜きで俺は優くんめちゃくちゃ才能あると思うよ。今度の文化祭でまた文芸コンクールか何かあるんでしょ？出してみたら？優勝間違いなしだと思ってるよ』

また軽い口調で翔太がにこにこ言う。『……そんな簡単なものじゃないよ。こないだのコンクールでも何も結果残せなかったし。翔太には悪いけど、もう僕何も出さないつもりでいるんだ』

しまった。ちよつと強めに言いすぎた。

ガヤガヤと騒がしい教室の空気が僕らの周りだけ薄く静かになったようだった。翔太はいつも明るくて楽しそうで、深刻に物事を受

け止める方じゃなかったからピクリともしない翔太の口がこの空気をより一層重くさせた。

「……なんで？ もう辞めちゃうの、文芸」

「書けないんだ。何も思いつかないし、周りとレベルが違いすぎるんだよ。来年は受験も始まつちゃうしもうやめ時かなって。普通の会社員になるよ、僕は」

「……書けないって？」

「だから！ もうアイデアが何にもないんだよ。何も出てこない！ これっぽっちも！ 何か書いてても全然楽しくないし……！」

勢いよく立ち上がったから椅子がガタンツとすごい音を立てて倒れた。普段出さないような大きな声を出したから息が上がる。肩で息をしてたらしわりと目尻が熱くなった。

「……っめん」

居た堪れなくなつて急いで鞆を引つ掴むと、僕は教室から逃げ出した。

目の端っこに途切れ途切れの廊下の窓が映る。木々はもう秋色に染まっついてカラフルで綺麗だった。だがそれも涙で滲んでゆく。

急いで階段を駆け下りると担任の先生が驚いた様子で僕をみていた。それも振り切つて走る。誰にも追いつかれないようにこれ以上ないスピードで走つた。

校舎裏につくと涙が止まらなかつた。どうしてこんなに身勝手に、子どもっぽくて、苦しいんだろう。どんなに落ち着いて平穩に過ごそうとしても感情はものすごい速さで色を持つてついでくる。

乱れた息を整えようと雑草まみれの地べたに座り込んだ。

すると誰かにポン、と肩を突かれた。びっくりして振り向くと翔太があの花柄のハンカチを持ってしゃがんでいるのが見えた。

「手で擦つたら目が真っ赤になつちゃうよ」

呆然としている僕に無理やりハンカチを押し付けてくる。

「なに……いらないよ。早く行きなよ、翔太ホームルーム遅れちゃうよ」

「優しくと一緒にはサボるから平気！」

「……はっ」

本日三度目の「？」だった。結果をお知らせすると、意外といけた。絶対無理だと思つたけど。慣れた感じでヒョイツと先に降りた翔太に手伝つてもらつて扉を飛び越えた。

「うわあっ……はー怖かつた……」

まだ心臓がドキドキいつてる。手が震えて足がじんじんする。本当に学校サボつちやつた。ていうか扉から飛び降りた！ やばいやばいやばいやばい。後戻りができない不安もあるけど、それよりも脳が痺れるほどの背徳感に溺れそうだった。楽しい、かも。そんな僕の心の内を覗いたみたいに翔太は「楽しいでしょ？」つてニヤッと笑つた。

「……まあ。それより早く行こうよ、電車乗らなきゃでしょ」

「はいはい、仰せのままに。先生」

「どういう意味だよ、それ」

駅の改札を通る時もその甘い背徳感は続いていた。ふわふわとした足どりのまま電車に乗り込む。平日の昼間の電車は平和で、蜂蜜を溶かしたみたいな陽だまりの中で鳴り止まなかつた心臓の音は徐々に落ち着きを取り戻していった。

電車は意外にゆっくりと進んでいった。僕は道中ひっきりなしに喋つた。間がもたなかつたというのもそうだし、純粹にお互いのことをあまり知らないことに気付いたというのもある。電車に乗っている時も、極楽寺駅についてから成徳院まで歩いているときもずっと喋つていた。

その中で翔太について幾つが分かつたことがある。ひとつは、てっきり彼女のものかと思つていた花柄のハンカチは真正正銘、翔太のものであつたこと。正確にいうと彼の祖母のものだつたが。

「親父が元ヤンで、漢二みたいなそういう考え方の人なんだ。俺は正直ケンカも嫌いだしどちかかっていうと綺麗なものの方が好きだから……どっちが大事とかはないんだけどたまに、辛くなるんだよね」

「どうして？ 翔太が綺麗なものの方が好きなら、お父さんにそう言つたらいいんじゃない？ 俺はケンカは嫌いだつて」

「うーん、曲がりなりにも俺を育ててくれた人だし……好きなものと大切なものってちがうじゃん？ どっちも大事にしたらいけないのど

またもやびつくりして翔太の顔を見上げる。勢いよく首を動かしたから眼鏡がずるつと鼻まで落ちた。翔太の顔が太陽とかぶつて眩しい。眼鏡がないからよく見えなかつたけどたぶん笑っているみたいだつた。

「どういうこと……？」

「話のネタがなくて何にも書けないってことでしょ？ 優くん文芸やめるの勿体ないから学校サボつて一緒にネタつくりに行こうつて言つてんの！ 優くん行きたいところある？」

「やっぱりヤンキーだ……」

というわけで僕とヤンキー（自称・原翔太）は翔太たつての希望で近場の海を目指すことにした。翔太はサボるつて言つたら海でしょ！ と意気揚々としている。

つくづく尾崎豊みたいなやつだ。僕は盗んだバイクで走り出すなんて勘弁だ。それでもノコノコついてきてしまったのだから、僕も相当きていたのかも知れない。

教室から飛び出した僕にも責任はあるし、こうなつてしまった以上腹を括るしかない。

スマホを取り出して近場の海を検索した。

「……あつ成徳院から由比ヶ浜が見えるっぽいよ」

「えっ？ 海には直接行かぬえの？」

「あれっ嫌だ？ 海つてちよつと騒がしいから僕あんまり好きじゃないんだけど」

「そうなんだあ……別に嫌じゃないけど……もしかして海乗り気でない？」

「あついや海は好きだよ。見る分にはね……」

「ほお……？」

うん、理解してくれただかどうかは分からないけど僕の意見は了解してくれただみだ。

僕は、江ノ電に乗つてとりあえず極楽寺駅まで行くことにした。

「で、これどうやって学校から抜けるの？ 早くしないと先生探しにくるよ、きつと」

「扉から飛び降りんのよ」

「はっ？」

かかつて……ヤンキーの友達とも教室でちゃんと授業を受けてる人達とも、どこにも馴染めない俺は結局何なんだろうつて。たまに思ふんだよね

ふたつめは、意外にも深く考える真面目なタイプだつたつてこと。僕はなんて言つたらいいのか分からなくて俯いて口をモゴモゴさせることしか出来なかつた。

みつめは、本をあまり読んだことがないつて事だつた。僕が信じられないという目で見つめると「そんな目で見んなよ……」とちよつとしよんぼりしてしまつた。なんだか可哀想になつてよく訳を聞いたら本が沢山ある環境で育つたことがないというのと、あと単純に読んでも眠くなるんだそうだ。僕は活字中毒かつてぐらい本を読んでもないとソワソワするタイプだつたから本を読んで眠くなる人間が不思議でならない。でも文芸部で出した僕の小説は眠くならず読むことができたらしい。素直に嬉しかつた。

「僕が初めて本をちゃんと読んだのは小学生の頃だつたんだけど、衝撃だつたんだ。世の中にはこんなに色んな人がいるんだなつて。ワクワクした。それで僕も人を喜ばせる本が作れたらなあつて……」

「へえ、すごいね。優くんはやっぱり」

「何もすくなくないよ。途中で諦めたし、才能もない」

「でも人を喜ばせる本をつくるつていう夢は果たせたんじゃん。俺、優くんが書いた小説読んでなんか救われたよ。」「悲しみの数を数えるより、幸せの数を数えようつて歌があるけど、今日の1日は君のためだけにあるんだから悔しかつたことと寂しかつたこと、傷跡もぜんぶ丁寧にひとつずつ数えてゆこうね」つて主人公に親友が言うところあるじゃん。俺そこで泣いたもん」

翔太はなんか恥ずいわつて笑つて誤魔化したけど、実は僕の方が泣きそうだった。

じんわりしみかけた景色を急いで拭つて、僕も少し笑つた。そうこうしている内に、目的だつた海の見える場所についた。思つたよりも長く歩いたので息が上がつた。

「めつちや曇つてる」

その景色は息を呑むほどの絶景でもなければ泣きたくなるほど温

かいものでもなかった。なんだかくだらなくなつて僕らはお腹がよ
じれるほど笑つた。

それでも、まるで僕らの周りの空気が今日だけは神様が特別につ
くつてくれたみたいに清く、深く揺れていた。

翔太の首筋を流れる汗がきらつと光つた。

『……翔太。花柄のハンカチも虎のスカジャンもぜんぶ翔太だよ。翔
太だけのものだ』

誰にもその価値を下げる権利なんてないのだ。翔太が将来誰にも
大事なものを奪われることのないようにできるだけ力を込めて言つ
た。翔太は『そっか……』とだけ言つて眉毛を下げて微笑んだ。

帰り道は逆にお互い一言も喋らなかつた。

理由は喋らなくても間が持つたというのと、お互いのことを全部
知ることは出来ないと思つたからだ。

家に帰るとお母さんに沢山叱られた。それはもう小松菜のお弁当
の比じゃなかつた。

僕はちゃんと謝つて、それからその日はぐっすり眠つたのだつた。

10月30日（金）

たぶん今日の日記は僕の人生で最後のものになると思う。また気
が向いたら別だけど。僕が日記を始めたのはあの国語教師の言葉が
きっかけだつた。

国語教師は言う『どんなに鮮烈な思い出もやがては美化され、色
褪せ、最後には消えてしまう。だけど言葉はずつと残る』

そしてそれが先生の本好きの理由だと。

僕は昨日の思い出を日記には書かない。
僕の中でとことん美化されて、色褪せて、最期に綺麗さっぱり消
えて欲しいからだ。

だから日記は今日でおしまい。

追記

僕はまた懲りもせず、文芸コンクールに挑戦することにした。

〔中学生部門賞 詩部門 受賞〕

せみのリサイクル

星槎学園北斗校

中等部一年 藤堂 貴



暑い夏がやってきました

暑い時間になると私達せみはいっぱいミーミーと
まるでリサイクルのように鳴くのです

私達が鳴くと周りの人達が鳴き声を聞いてくれるのです
私達は楽しく歌うために今日もせみいっぱい鳴きます

〔中学生部門賞 俳句部門 受賞〕

星槎学園北斗校

中等部二年 和田 尚樹



ゴーヤ生りはしゃぐ祖父見て後ずさり

〔中学生部門賞 短歌部門 受賞〕

星槎学園北斗校

中等部二年 石倉 皓太



見送れず太陽のような先輩を梅雨の晴れ間に
さみしく思う

星槎文芸大賞 実施要項（一部抜粋）

1. 目的

文芸創作活動に取り組むことで、関わり合いを大切にする星槎で育まれた感性を磨き、コミュニケーション能力、自己表現力を育て、作品を通して全国の仲間との交流の中で発見と感動の場をつくる

2. 応募資格

星槎国際高校及びフリースクール生、星槎学園高等部及び中等部、星槎中学校、星槎もみじ中学校、星槎名古屋中学校在籍生徒

3. 募集部門

- ①小説 ②小論文 ③エッセイ
- ④詩 ⑤俳句 ⑥短歌

4. 応募規定

- ① 校内選考後の出品は生徒一人につき、一部門にしほり、作品数も一点に限る
- ② 応募作品は未発表作品に限り、他賞との二重投稿を禁止する
- ③ 受賞作品は発表時に修正を求める場合がある
- ④ 受賞作品の出版権などの諸権利は星槎国際高等学校に帰属する

編集後記

星槎学園大宮校 河口 優花

星槎文芸大賞が星槎オリビックの一部門となつて、今年で五回目の開催となりました。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、各校厳しい状況の中、本作品集発行のため、ご協力いただきまして誠にありがとうございます。

今年度は、各校で選考された一・二・四作品が集まり、例年にも増してより精練された作品の世界観に驚くばかりです。また、昨年引き続き、特別審査員として参加していただいた伊藤玄二郎先生（かまくら春秋社代表取締役、星槎大学教授）のご配慮により、今年度の受賞作品を文芸誌「詩とファンタジー」にて誌上発表していただき、著名な方々から講評をいただくことができました。さらに、星槎大学長賞、星槎道都大学長賞を新たに新設し、星槎大学嶋田優先生、星槎道都大学山本一彦学長にも審査を賜りました。詩・俳句・短歌において中学生部門も設立し、中学生から高校生まで活躍の場を広げることができました。星槎国際高校は、日本一の女子サッカーをはじめ、野球などの団体種目や、器械体操、フェンシング、フィギュアスケートといった個人種目で生徒たちが大いに活躍しています。今後においても、星槎の若い力が発揮されることを楽しみにしております。そして、スポーツだけでなく、「文芸の星槎」もより活躍の幅を広げていってほしいと思います。

今もなお社会情勢は不安な状況下ですが、その不安や悲しみ、苦しみを内に留めるのではなく、文章として書き綴ることで、人の心を動かす作品が生まれます。また、不安の中でも、嬉しいことや楽しいこと、小さな幸せを感じる機会も多くなつたと思います。自分が感じた思いを内に秘めておくのも良いですが、外に出して表現することで、共感する喜びを感じ合えることができます。本作品集において、作品と作品、人と人とが出会い、共感し合うことができれば大変嬉しいです。

年度を重ねるたびに、作品により磨きがかかり、生徒一人ひとりの趣向を凝らした作品は、読み手に大きな感動を与えてくれます。また、その感動は人の生きる原動力となります。いつの時代も、人の心を動かすのは、「言葉」であると考えます。例えば、日本には古くから「言霊」と呼ばれるものがあります。「言霊」とは、人が発した「言葉」に霊力が宿り、ある種の力が加わることを言います。だから、人の思いがこもった「言葉」には力が加わり、人を動かすので

す。本作品に綴られた「言葉」にも作り手の「思い」が込められています。人の心を動かす星の輝きと星槎の心を、誰しもが心に秘めています。本作品集から感化され新たな星槎らしい作品が誕生することを心待ちにしております。末筆ながら、本作品集刊行に至るまでご協力いただきました、塩谷実行委員長はじめ、各委員の先生方、各校舎ご担当者様、誠にありがとうございました。そして、素晴らしい作品をエントリーしてくださいました生徒の皆さんに御礼申し上げます。来年度もより感性を発揮した作品の応募があることを楽しみにしております。

特別審査員

星槎大学

伊藤玄二郎 教授

（詩とファンタジー編集長）

（編集ベテラン）ご会長

嶋田優 教授

星槎道都大学

山本和彦 学長

編集委員

監修 塩谷 貴男（文芸大賞実行委員長）

編集長 河口 優花（星槎学園大宮校）

委員 須田 心作（星槎国際高校仙台）

委員 中川 彩香（星槎国際高校川口）

委員 天野 桂（星槎国際高校富山）

委員 大平 奈美佳（星槎国際高校那覇）

星槎文芸大賞

令和二年度受賞作品集

令和三年一月二十八日発行

編集者 前田 豊

発行者 星槎国際高等学校

〒〇〇四一〇〇一四

北海道札幌市厚別区もみじ台北五丁目二二一

TEL 〇一一八九九一三八三〇

FAX 〇一一八九九一三八三五

印刷 (株)横浜綜合写真



※ かまくら春秋社より、令和2（2020）年12月25日発行の、「詩とファンタジー No.42」に生徒らの受賞作品が講評を添えて掲載されています。ぜひお買い求めください。
<http://kamashun.shop-pro.jp/?mode=f8>